

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語談話研究の現状と展望

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): Review on Japanese Discourse Studies, Discourse analysis, Conversation analysis 作成者: 茂呂, 雄二, 小高, 京子, MORO, Yuji, ODAKA, Kyoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001136

日本語談話研究の現状と展望^{①②}

茂 呂 雄 二

小 高 京 子

要旨：本論は2部からなる。第1部では日本語談話研究の現状を展望して、それぞれの研究が指向する方法論の違いを取り出してみた。第2部には日本語談話に関する研究の文献目録を収めた。日本語談話研究は学際的に展開されており、言語学では言語行動研究および談話分析、社会学からはエスノメソドロジーに基づく会話分析とライフストーリー研究が、心理学・認知科学研究からはプロトコル分析およびインターフェース研究などが、広い意味での日本語談話分析研究を行っている。この研究の広がりからわれわれが取り出した研究指向の違いは以下の通りである。

- ①「記述的指向」と「応用的指向」
- ②「分析者視点」と「談話当事者の視点」
- ③「ことばへの注目」と「ことば以外への注目」
- ④「主体＝規範指向」と「社会的関係性指向」
- ⑤「現実・秩序指向」と「変化・多様性指向」

キーワード：展望，談話分析，会話分析

Abstract: This review consists of two parts. In the first section, the studies on Japanese discourse are overviewed and different orientations of methodology identified. In the second section, a bibliography of studies on Japanese discourse is presented. Japanese discourse study is multidisciplinary. It includes linguistic language behavior study and discourse analysis, sociological conversation analysis and life story study, as well as psychological protocol analysis and human-machine interface design. The different methodological orientations identified here are as follows: description vs. application oriented; discourse analyst vs. discourse user oriented; speech event oriented vs. non-speech event oriented; subject and norm oriented vs. social relationship oriented; order of situation oriented vs. heterogeneity and change of situation oriented.

Key Words: Review on Japanese Discourse Studies, Discourse analysis, Conversation analysis

1. 問 題

この論文は2部に分れる。第一部では、日本語談話分析の現状と展望についての考察を述べる。第二部には、資料編としてひろく日本語談話に関する文献目録を掲げる。

談話の概念に話しことばも書きことばも両方とも含める場合もあるが、ここではおもに話しことばを考察の対象とする。資料の特徴に即して具体的にいえば、日常場面の会話の録音、母と子のやりとりのビデオ資料、お年寄りに人生を語ってもらった記録など、なんらかの生の話しことばを研究しているものを考察の対象にする。なお、この論文ではいわゆる非言語的行動も含めて話しことばとくくことにする。

談話とはことばの使用、つまりことばによるコミュニケーションの現実的な現象あるいは現実的な単位をさす概念である。それを理解するには、言語形式としてあらわれる側面だけに注目するだけでなく、多面的な理解が必要になる。すなわち、その談話によってどのような社会関係が作り出され維持されるのかといった側面、その社会関係の中であって談話を使用するとき使用者にどのような知的な営みが展開されるのか、談話の参加者の間でどのような人的関係作りが進行するのか、といった多面的な理解が前提となる。そこで、この論文では以下の4つの研究領域を取り上げることにした。

- ①「言語学的な研究」
- ②「社会学における談話研究」
- ③「心理・認知研究における談話研究」
- ④「インターフェース研究」

その取り上げかたであるが、第二部の資料編では、日本語談話研究の現在の到達点を示し、あわせて文献索引としても利用できるようにと考えて、話しことばとしての日本語談話に関連する文献を可能なかぎり収めることにした。しかし、第一部の考察編の限られたスペースでは、第二部の文献すべてに言及しながら考察を展開することは不可能である。そのような理由から、第一部では日本語談話研究の「問題性」とここで呼ぶものの抽出を第一の目

標にした。

日本語談話研究は、ことばの研究の中では比較的新しいものであるが、それでも学問領域的な広がりにおいても、取り上げられる談話現象の広がりという意味においても多種多様である。ここで「問題性」と呼ぶのは、その多種多様な研究の広がりをつく、何らかの、基本的な、テーマないしはテーマ群である。つまり多種多様な研究の流儀に、共有される場合も、逆に対立的に主張される場合も含めて、ということは、表面的にはばらばらに見えるが確かにその背景にあるだろう、もろもろの研究の関係理解を目標にする。その目標にとって、たとえば典型的な事例となる場合、あるいは見逃すことのできない議論と評価される場合に限って、必要な文献を引用、参照しながら、第一部の議論をすすめることにする、この場合には日本語談話に直接には言及しないものについても、たとえば対話・談話過程に関する基礎的な議論についても参照する場合もある。

ここでいう「問題性」は、必然的にわれわれの主観的な読みに限定されたものにならざるをえない。このような主観性は、どのような努力をしても結局のところ排除できないだろうし、ほとんどはじまったばかりといえる談話研究では議論の活性化も引き起こしうるだろうから有意義だと考えた。そのような理由でここでは「問題性」の追求を第一の目標においた。

2. 日本語談話研究の現状と展望 ― 考察編 ―

2.1. 各研究領域の概観

談話・会話に関して何が問題なのかを引き出すために、まずここで取り上げる4種類の研究領域を概観しながら比較してみたい。比較によって、何がどのように問題にされているのか、それぞれの研究アプローチの異同を引き出してみよう。

2.1.1. 言語研究

この領域には、おおまかに3種類の談話研究の流れを区別することができる。ここではそれを「談話行動研究」、「発話機能に関する研究」、「会話の分

析研究」と呼びわけておく。

第一は「談話行動研究」である。国立国語研究所を中心に行われてきた、談話行動の包括的な把握を目的にした記述的研究が中心となる（国立国語研究所，1971；1987）。この流れは、言語研究の中でも開拓的な領域であり、それと同時に扱うべき現象も非言語行動や参加者特性など多岐に渡るものである。そのような性格に由来して、方法論および研究対象論の確立と談話行動のモデル構築が求められてきた。「談話行動の要素」，「単位」そして「記述法」が議論されている（南，1972；1987；杉戸，1987；江川，1987）。

この流れは、日本語が実際にどのように使用されているかの実態把握を目指すものであるから、たとえば現実の日本語使用に近い教材作りなど、日本語教育への応用を目指す研究と関心を共有することになる（水谷，1991；田中，1985）。たとえば「あいづち」といった言語行動・表現に関して比較的まとまった数の研究が行われている（堀口，1991）。

第二の流れは、スピーチアクト研究につながるもので発話の機能分類を提案するものである。そのなかでも国立国語研究所（1987）は細かな分類枠組みを提案している。これは個々の発話の意味機能を記述的に特定するための分類枠組みの提案である。これをもとにしてたとえば会話の流れを記述する、あるいは機能の分布の違いを談話間に見出すなど、分析の手段としても利用されている。例えば、ザトラウスキー（1991a），中田（1992）は、この分類枠組みを利用して談話単位の特定をする、あるいは繰返しなどの談話の中の特定の形式を分類し記述するなどに利用している。

第三は「会話の分析研究」である。この流れの一部は社会学の一つの研究分野であるエスノメソドロジーが展開した「会話分析：conversation analysis」に触発され、その方法と研究課題を受け継いだものということができる。たとえば電話におけるやり取りの開始部および終結の問題を扱っている小野寺（1992），熊取谷（1992），岡本（1990）などの研究が、この流れに属する。

言語間，文化間の比較を行う研究をこの第3の流れに含めることができよ

う。この研究においても会話分析の成果が取り入れられているが、「勧誘場面」(Szatrowski, 1992),「葛藤場面」(Jones, 1992),「会議場面」(Watanabe, 1992)などの実際の会話場面の日米比較資料を使って、会話の流れおよび使用される談話形式の日米間の異同を細かに検討する作業が行われている。

2.1.2. 社会学的研究

次に社会学的な談話研究であるが二つの流れに注目してみたい。

第一は、言語研究の第三の流れと同じようにエスノメソドロジーの問題・方法を採用している流れである。従来のマクロな社会理論へのアンチテーゼとなる理論指向を具体的に資料的に実現するために、この流れは会話に注目してきた。つまり社会的現実が会話によって「いま、ここ」の場で作り上げられていくプロセスをミクロかつ精密な分析で示そうと、あるいは特定の主題をもった場の成り立ちを会話過程を通して明らかにしようとしている。

エスノメソドロジーは、会話を研究の素材として扱うのだが、あくまでも素材であり、対象とするのは社会的現実あるいは社会秩序の問題である。これが、この談話研究の特徴になる。その点で、先の言語研究における会話研究と対照的になる。すなわち言語研究では、言語使用者を研究対象として、ポーズ、順番取りなど、会話進行に関わる細かな「ルール」抽出が主な目標になる。しかし、この社会学的な研究の流れにおいては、言語そのものや、会話の内容が問題にされるのではなく、「いかなる方法で人々がことばを用いて他者とともに行為しているか」つまり「会話的相互作用の組織化」が研究される(好井, 1991)。そして研究の対象は、社会的な行為であり、それによって作り出される社会的現実(秩序)である。そのために、かなりの数の周到な理論的方法的な議論が行われてもいる。

この流れにおいては、多様な会話場面が研究対象にされている。医療施設(山田, 1986 ; 1992), カウンセリング場面(西阪, 1990a ; 1991 ; 1992a), 法律(樫村, 1992), 差別問題(好井, 1989 ; 1990 ; 1992), 子どもと大人(山田, 1985b)などが取り上げられている。

ほとんどの場合に、言語行為うちの会話の側面が取り上げられるが、西阪(1992a)のように、ある特定の社会秩序のなかの参加者の相互の身体の配置関係が問題にされる場合もある。

第二に「ライフストーリー」研究の流れに注目してみたい。これは、いわゆる歴史学が、歴史的な大事件を書きことばの資料にもとづいて研究するのに対して、「普通の人々」が話しことばとして保存している「口述の、個々人の歴史」を掘り起こそうとしていることから、オーラルヒストリーあるいは生活史研究の一分野と位置付けることができる。ライフストーリー研究は、人が自分の過去をどのように語るのかを明らかにしようとする点で談話研究と見ることもできる。興味深いのは、たとえば資料の掘り起こしを目的にしてインタビューを行うのだが、調査者とインフォーマントの関係性を問題にしている点である。たとえば、疎密といった両者の関係によってインタビューというインタラクションがどのように変化するのか、何度か行われる語りの中でたとえば語りの内容が固定化するなど、語りの中に含まれる動きを追うなど興味深い議論を行っている(小林, 1992; 奥村・桜井, 1991)。

心理学研究にもこの流れと平行する研究領域があって、「想起研究」と呼ばれている。とくに注目したいのは、浜田(1986; 1988; 1991; 1992a; 1992b)の一連の研究である。取り調べ室における捜査官と供述者の関係を重視して、「事件」の想起を語りの問題から解明しようとしている。それは係争中の事件に関わるアクチュアルなものである。

また、想起に関する社会的なアプローチも行われつつあり、岩井(1990; 1992)が展望を行っている。

人々の実際の作業や仕事に関する研究は、「ワーク研究」と呼ばれる(山田・好井, 1991)。若林(1990)は、漁労社会のエスノグラフィーを行っており、インタビューによって漁労社会の成員が、一人前になる過程について資料を収集しているが、漁労現場における役割の配置や通信機器などメディアの問題を取り上げて、個人史とワークの関連を考えているところが注目される。

2.1.3. 心理・認知研究

この研究領域では、「教室コミュニケーションの類型」、「認知プロトコル研究」、そして「状況論的談話研究」の流れを取り出すことができる。

第一の教室コミュニケーションの類型に関する研究は、教授活動の改善を目指して行われたものである。それぞれの教室には、子どもと教師の関係性に応じて、それぞれの固有の「雰囲気」とでも呼べるものがある。この雰囲気の傾向を客観的に示すために教室談話が利用されてきた。つまり分析手法としては、それぞれの発言について、子どもがイニシアチブを取るのか、教師が取るのかによって分類したり、発言を受容、賞賛、質問、講義などのカテゴリーに分類して、その分布の違いから、それぞれの教室の雰囲気を特定しようとしたのである。Flanders (1970) のカテゴリーを参考にして行われた研究がかなりの数報告されている。

第二の認知プロトコル研究は認知心理学・認知科学の領域からの談話・会話資料の利用の流れである。つまり知的な心理プロセスの解明を目標において、談話資料を認知プロセスの反映と見る立場である。

認知プロトコルは2種類に分けることができる。一方は、語ったものから心理プロセスの進行過程を記述するために、特定の課題場面をもうけて収集するものである。たとえば文章を書くなどの知的な課題を解決するときに、自然・自発的に出てくる発話や、心の内で何をしているのか解決者自身に語らせた談話資料である。他方、母子など二者（以上の人々）の相互作用場面の非言語行動を含めた記録もプロトコルに含まれる。相互作用の記録から、たとえば知的プロセスの発達過程を記述しようとする場合である。

前者のプロトコル研究には、安西・内田（1981）の作文研究や、内田（1991）の物語の産出過程に関する研究がある。

後者には、無藤ら（1985）の種々の会話場面に注目して会話過程を分析したもの、および田島ら（田島，1988；1990；田島・上村，1988；上村・田島，1988：1990）の母子相互作用の過程の中で認知課程がどのようにマイクロに変化するかに関する研究などがある。プロトコル分析の方法について田島

(1992) のまとめがある。また海保・原田（印刷中）プロトコル分析によって何が可能なのか、実際の手法の評価と、プロトコル分析で何が分るのかについての基礎的な議論が行われている。

第三の流れは状況的談話研究である。これは認知研究にひそむ非社会性・没歴史性の批判と反省から、現在生れつつある流れである。

従来認知研究は人の知的な営みを個人の頭の中でおこるメカニスティックなプロセスと等しいものとみなす傾向があった。しかしながら実際の知的営みは、個人の内部としてはもちろんであるが人々の共同や分業として起こっているし、前もって定められたアルゴリズムに従うというよりも共同の場において構成的に築き上げられる面をもつものである。加えて歴史に無関係なままに固定されたプロセスではなく、たとえば新しいメディアの導入にともなって変るように、シンボリックな意味と人々の共同の在り方を常に変化させていくプロセスである。このように従来の認知理論を批判する「状況的認知」（上野，1991；茂呂，1991a；1991b）の観点が打ち出されている。この観点にもすでにふれたエスノメソドロジーの構成的相互行為の見方が影響をあたえている。

状況的談話研究は、この状況的認知研究の一部と位置付けることができる。会話過程の分析などを通して、状況的な行為の特徴を明らかにする場合に見られるように、また言語使用の固定化を指摘するなどして、現在の状況的行為の固定した在り方を批判する研究が行われており、談話分析を研究の手段とし、理論例証の方法としている。

有元（1991a；b；c）および上野（1990；1991b）は、学校教育の場にそなわる、意味の吟味なしの固定化した言語使用様式を「学校の言語ゲーム」と呼んで、その実態を調査するとともに、子どもたち自身にそのような言語使用に気付かせる教育環境を提案し実践している。

茂呂および當眞（Moro，1991a；Toma，1991）は、教室談話のミクロな分析から発話のタイプの類型を取り出して、この発話タイプの多様性が、教室という現実の維持と変化にどのように関連するかを論じている。茂呂は、

とくに方言的なコードと共通語的なコードの多様性に注目し、眞眞は、他者の発話の受継ぎかた（他者に言及しながら受け継ぐか、言及なしでそうするか）の日米差に注目している。

上野（Ueno, 1991b）は、より教科内容に即した談話研究を進めている。「落下」という物理の主題において、どのようなコンテキストが「自明のもの」として扱われているか、理論的コンテキストの歴史的多様性と、それぞれのコンテキストに特有の言語使用を明らかにし、その一方で、これらのコンテキストが物理学習者によって、どのように使用され、あるいは固定化されているのかを明らかにしている。あわせて、初心者が取りやすいコンテキストの組み替えを目指した実践を行っている。

2.1.4. インターフェース研究

コンピュータを媒介にした通信ネットワーク、テレビ電話、テレビ会議システムなど、新しいメディアの開発と普及にともなって、応用的な指向からの談話・会話研究もはじまりつつある。これをインターフェース研究とここでは呼ぶことにする。

「インターフェース研究」は、「CSCW（Computer Supported Colaborative Work：コンピュータに支援された共同作業）研究」の名称でも呼ばれることがあるが、コンピュータ科学、心理学、認知科学、哲学などの学際的な応用研究として展開されようとしている。

たとえば、テレビ会議は、普通対面対話状況で行われる会議などを離れた場所にいる参加者の間で行おうとするグループウェアである。そのとき、従来の対面の会議場面とかわりのない場を作り出すために、機械側にどのような工夫をすればよいのか、従来の会議の室的特徴をとらえるための談話研究と、そして新しいメディアによる会議の場にどのような談話・会話言語が必要か、などの研究が行われつつある。

たとえば、原田（1992a；1992b）は、テレビ電話使用の困難に注目している。電話、キーボード対話システム、音声によるメモ、テレビ電話を日常会話に近い状況を組んで大学生の親しい二人組みに使用させている。電話会

話のプロトコル分析とユーザの使用感の評価を分析して、電話の使いやすさとテレビ電話使用の困難を会話参加者のおかれる対話の場の特徴に結びつけて考察している。

旭ら（旭，1989；旭，1992；旭・伊藤・宮井，1989）は、心理・認知研究ですでに紹介したプロトコル分析を利用している。インターフェースの使い勝手などに関するユーザー側からの評価をとらえるために、プロトコル分析が利用されている。

2.2. 問題

4領域に共通していえることは、研究の「若さ」である。全くはじまったばかりであったり、談話・会話研究の豊かな可能性と必要性が強いいわれながら開拓的な段階にとどまっていたり、早い段階から開始されたとしても、その後の研究報告は散発的であったりするのが現状である。

このような現状の背景は談話・会話という研究対象のとらえどころのなさに求めることができる。ここでいう、とらえどころのなさの一部は、われわれにとっての談話・会話が自明の過程であること、つまり、あえて説明を必要とせずに日々展開されるという、談話それ自体の特徴を反映している。しかし、とらえどころのなさは研究する側の問題設定の在り方とも当然関連する。ここで必要なのは何をどのように問題化していくかである。

上の共通点とともに、4領域のそれぞれが他のアプローチに対してもっている違いも見い出すことができる。同時に同じ領域のなかにも異なる指向が含まれていた。これらの違いを明確化することによって、とらえどころのない談話現象から、より鋭いかたちの問題を取り出すことも可能なのではないだろうか。以下の指向を取り上げてみたい。

- ①「記述的指向」と「応用的指向」
- ②「分析者視点」と「談話当事者の視点」
- ③「ことばへの注目」と「ことば以外への注目」
- ④「主体＝規範指向」と「社会的関係性指向」

⑤「現実・秩序指向」と「変化・多様性指向」

2.2.1. 記述指向と応用指向

言語学的研究の包括的な記述を目指す指向とインターフェース研究に見られる応用指向がそれぞれに、「記述指向」と「応用指向」の代表となる。しかしそれぞれの領域内にも、そして個々の研究にもこの二つの指向が少なからず共存するのが実情だろう。ここで、たとえ実際に応用のための実務的な作業をしないとしても、少なくとも談話現象に解決すべき問題を見つけようとする方向をつねに取り続けることが必要である、というのが、われわれの考え方である。つまりことばの研究の「工学化」を主張してみたい。この工学化が、比較という視点をもたらし、その結果、談話がとらえやすくなると考える。

たとえば社会学的な談話研究においては、会話分析を利用して、一方に、より一般的な行為理論の構築をめざす動き（西阪，1988；北澤，1989）があり、同時に他方には医療や差別といった解決すべき問題を抱える現場を指向する動きがある（山田・好井，1991）。制度の中の行為や差別といった特殊な行為でさえ、それに参加するものにとっては自明な過程として進行する。この社会学的研究の場合には、実践的な解決すべきものをはらむ主題を追求することが、行為の自明性から距離をおくという理論的作業の助けになっているといえるのではないだろうか。

また、言語学的な研究のうちで、日本語教育という実際的な分野に関して、たとえば、あいづちの実態に関する研究・資料が短期間になんらの数蓄積されている。このことの背景には、日本語教育研究が応用を目指して行われるという事情だけでなく、それが「比較」という方法論を必然的に取らざるをえないからではないだろうか。つまり、教授法および教材の開発のために、異なる言語間、使用者間などの比較が行われ、そのことが研究を進展させたと考えてよいのではないだろうか。

同様のことは、インターフェース研究にも見られる。新しいメディアの開発・導入にともなって新しい談話・会話が成立しつつある。この新種の会話・

談話の質的特徴をとらえてメディアの改善を目指す場合には、従来の談話との比較も必要となる。そして逆にメディアを介した新しい談話の特殊性・異様性が、すでに述べた自明な日常談話を解剖するための手段と媒介を提供してくれる場合もあるのではないだろうか。

2.2.2. 「分析者の視点」と「談話の当事者の視点」

談話を分析する分析者の視点を重視する指向と、談話を使用する人、あるいは談話行為を行う当事者を重視する指向を、対比的に取り出すことができる。

言語学的研究では、南（1972）の論考を出発点にして談話の分析単位に関する議論が続けられている。南は、「会話」と「談話」の分析単位の区別を提案している。これを受け継ぎながら、杉戸（1987）は、一人の参加者のひとまとまりを指す「発話」の単位を提案している。これらを受け継ぎながらザトラウスキー（1991a）は「話段」という単位を追加することを提案している。「話段」は文章論でいう「段落」に対応するもので、談話の話題のまとまりを指すものである。

この単位の議論は、談話現象の包括的な記述という言語研究の目標のもとにあるものである。つまり複雑で、多様な広がりをもつ談話現象を整理するために、そして談話構造の特定および談話の類型化のために、談話現象に大きさからいくつかのレベルを設定して、そのレベルを道具にして記述を詳細なものにすることを目指すのである。このような方法論の背景には、ことばを「文－句－節－語－音韻」に分節する言語学の伝統的な方法論からのアナロジーがあると考えられる。

このような単位設定は、談話現象を外部から、つまり分析する側に見えるがぎりにおいて談話現象を操作する方法論である。

たとえば「発話」の単位について杉戸（1987）は「一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続（笑い声や短いあいづちも含む）で、他の参加者の音声言語連続（同上）とかポーズ（空白時間）によって区切られる単位」としている。この定義に明らかなように、発話は分析するものにとって、見える、

そして聞える手がかりについての定義となっている。

このような指向に対して、談話を使用する側、現象現象の内部にいるものにとって、その談話現象がたとえばどのようなものと見えるのか、どのような実践的な目的の下に操作されるのか、その談話行動を生み出す知的な操作のアルゴリズムはどのような特徴を備えたものなのかを問題にすることもできる。

たとえば社会学研究では、発話単位が指す談話現象を「ターンテーク＝発話の順番取り」として、「社会的な現実」として、そして、この現実によって談話参加者が感じ取る「社会的な構造感」と見る。つまり、順番取りに、一方の話者の発話終了の行為と他方の話者の発話開始が互に依存し合って作る、いわば「権利と義務」の交換の出来事を見るのである。これは、山田(1991)が述べるように「単に研究者による理論構成ではない。まずは成員自身が会話に対してもつ志向を記述しようとするものである」(P.220)。

心理・認知研究においても、談話現象は言語そのものの事実としてではなく、談話の利用者の心的・知的なプロセスとして描かれる。ただし、その描き方には、現在のところ異なる方向が共存する。そして、その一部はいま述べたエスノメソドロジーの方向とも異なるものである。これについては後に述べる。

2.2.3. 「ことばへの注目」と「ことば以外への注目」

談話研究の中心的な対象は、やはりことばである。しかし、ことばが談話使用の中でどのような位置をしめるのかについて適切な理解をするためにも、ことば以外の面とことばの相互関連を研究対象の一つにすえることは意味がある。

ことば以外の側面としては以下の3側面を考えることができよう。

①身体的な側面

②道具・メディアの側面

③言説の側面

視線、視線接触、身ぶり、動作が身体的側面に属する。たとえば西阪

(1990)は遊戯療法場面の子どもとセラピストの会話を、同じく西阪(1992)は箱庭療法を取り上げて分析している。治療場面の言語的な組織化に先行するようなかたちで、治療者と被治療者の微細な身体の動きと視線が、相互のからみあいのなかで状況を構成する過程がダイナミックに描かれている。西阪は従来の身体動作の機能を分析者がまえもって付与するような行動分析を退けて、治療場面という社会的秩序が参加者の身体の配置によって、そのつどそこで作り出されることを示している。

道具・メディアの側面には、ひろく談話の場にそなわるモノや道具を含めることができる。談話の場にある道具・メディアは、ただ談話の場に、添え物的にあるとはいえない。たとえば、あるモノを基準にして談話参加者が互いの位置極めをするような場合があり、そのような場合には、談話秩序の形成に大きく関与していることになる。たとえば西阪(1990)によると箱庭療法場面において、箱庭を前にしてセラピストとペイシャントが横に並ぶような位置決めが取られ、妨害・挿入的要因で治療の秩序が崩れるとき、この位置決めも崩れるという。仕事・作業環境は多種多様なメディアによって今日ますます複雑になっている。われわれの談話生活も、ことばだけによって進行するというよりも、機器使用とともに進行する時間がしめる割合が高くなっているといえよう。たとえば、Goodwin and Goodwin (in press)は、航空管制業務という作業場面を取り上げ、管制官の発する談話の音調面と機器への注視の関連を報告している。

言説の側面とは、ある社会的行為に関して流通している、そして多少紋切型の説明を指している。教育場面には、たとえば、「いきいきとした、主体的な学習」といった決まり文句があるし、精神医療場面には「被治療者の自主性重視」といった医療言説が存在する。言説も談話状況の構成に関わっている。一面では、談話の行為に関する行為者自身による説明を通して関わる場合がある。他方、実際の談話行為とずれを見せながらも、その談話状況がどのように作られるべきか、いわば目標を表している場合もある。たとえば教育の場面では児童の主体性が重視され、教師も自身の教育方針についてそ

のような説明を行うが、実際の教授行為はむしろお仕着せや誘導に満ちたものであり、その誘導を表面的には見えないものになっていることも多い(Edwards and Mercer, 1987)。

以上簡単に見たように、ことば以外の側面も、ことばとおなじように具体的な個々の談話状況あるいは談話の現実を作り上げるのに寄与していることがわかる。次の二点が必要になる。第一は、ことば以外の諸々の側面を含めた談話状況の一般理論の模索が必要のように思われる。それは、むしろわれわれの行為一般に関する理論といえる。第二に、ことばの特殊性の見極めが課題となるように思われる。談話の行為にさまざまな側面が関連するとして、そのからみあいのなかで、ことばの側面がどのような特殊性をもつのかを明らかにする作業が必要になる。

2.2.4. 「主体＝規範指向」と「社会的関係性指向」

ここでいう主体＝規範指向とは、一面において談話使用を使用者個人の意図に還元する立場であり、別の一面で個人を無力なものとしなして社会規範に還元する立場である。この二つの立場は表裏一体をなしている。

これに対して社会的関係性指向とは、談話過程が複数の参加者の相互行為のなかで、相互行為として、そのつど、社会的に達成されること、あるいは構成されることを強調する立場である。

前者の指向は一部の言語研究および認知プロトコル研究にみられる指向であり、後者は社会学的研究と心理認知研究のうちの状況的談話研究の採用する指向である。

言語研究のうちの会話の分析研究が、社会学の一分野であるエスノメソドロジーの影響を受けていることは引用される論文からも明らかである。しかし両者の指向にはかなりの隔たりがあるのではないだろうか。

たとえば、エスノメソドロジーが提案する概念のひとつに「隣接ペア」がある。これは会話進行に関する、ある種の規範ないしはルールである。たとえば「質問」に対して「答え」で応える発話連鎖の類型が隣接ペアである。隣接ペアはある種の規範だが、質問に対して答えという組合せを支配するよ

うなものとしてではなく、聞き手と話し手の行為解釈の枠組みといった行為組織の資源としてとらえられる。言語学的な会話研究がこの種の連鎖の形式の詳しい特定に向うのに対して、社会学的分析では隣接ペアの用いられ方、つまり規範あるいはルールとしてあらわれつつ、協同的な行為の達成にどのように関わるのかが問題にされる。

社会学会話分析研究は、社会をどのように位置付けるか、たとえば、いわゆる社会唯名論と社会実在論をいかに二つながらに乗り越えるか、その類の問題解決に支えられており、その解決の例証として会話データが利用される。しかし、言語学的会話研究は日本語教育のための教材・方法開発に支えられる場合はあれ、多くの場合記述が目的にされている。会話現象および会話使用者の位置付けに関する基礎的議論はわれわれの見た限りでは行われていないようである。

認知プロトコル研究においては、発話を何らかの機能カテゴリーに対応づける方法が用いられる。そのカテゴリーは分析者によって分析以前にあらかじめ作られたものであり、それぞれの発話単位に発話機能を割り当てるという分析手続が採用される。この後、異年齢の子供の間あるいは母子の間の機能分布の違いが特定され、知的システムあるいは知的発達の過程の記述が行われる。

この場合、ある発話が何らかの機能を発揮するという構図を取るようになるが、そこには知的行為者の「主体的意図」が前提になっている。つまり発話の意図があり、それが、たとえば「相手方への情報伝達」や「行為の誘発」などの発話機能を発揮する、という構図が用意されている。

エスノメソドロジーの立場から、認知研究を批判的に吟味する Suchman (1987) は、この主体的意図にもとづく知的行為のモデルを planning model と呼んで批判する。planning model は行為を可能とする資源と結果の双方を行為意図であるプランに還元してしまう。プランは知的行為の生成メカニズムというよりも、行為の資源のひとつにすぎない、と批判する。

ある発話機能を導く「意図」なるものも、その都度、その場で社会的相互

行為の中で達成されると、社会的関係性に力点を置いて意図をとらえる方向もありうる。

言語研究における発話機能あるいはストラテジーの概念に注意しておきたい。いずれも日本語教育研究において、教材作りや外国人話者の学習項目設定など、限定された目的のために導入された。その後、談話研究の拡大とともに、日本語談話の記述に利用されつつある。しかし、ここで用いられる機能およびストラテジーが、談話使用者に関して、どのような理論を背負ったものなのかについて積極的な議論がない。もし、認知プロトコル研究と同様に話者の意図を前提にするならば、その没社会性が批判されるべきである。

2.2.5. 「現実・秩序指向」と「変化・多様性指向」

社会学のうちのエスノメソドロジー研究が主張し、認知研究の一部である状況的認知研究が採用する指向が、社会的な関係性を強調する指向である。これを、さらに細かに分けるならば、現実・秩序指向と変化・多様性の指向に分けることができよう。

あえて、このような区別を立てるのは、社会的関係性指向による談話行為の説明に対して若干の不満を感じるからである。談話行為者の協同行為による現実・秩序の構成が強調され、たしかに、その構成過程のミクロな動きを理解することができる。ミクロな分析をほどこした資料を掲げて、意図主義あるいは規範主義を回避する理論的方向を示すという戦略も重要であろう。しかし、それは、社会的秩序なり現実を後追いすることにしかならないのではないだろうか。先に応用指向と記述指向の対比で述べたことにも重なるが、ある談話秩序のはらむ困難の解決を目指して、その談話秩序の在り方を批判的に明らかにして、さらにその解決を模索するといったアクチュアルな指向も必要である。

そこまでは射程に収めることはしないにしろ、さしあたり必要な指向は、談話状況の変化や、その変化と関係するだろう談話状況に潜む談話の質の多様性を明らかにする指向ではないだろうか。

その必要性を理解するために、まず、何らかの「隠蔽」を含む談話状況に

注目してみよう。例えば教室談話を考えてみる。上野と有元（Ueno, 1991a; Arimoto, 1991c）が指摘するように教室には意味の吟味を離れた手順化した談話秩序がある。算数の授業を例に取れば、「体重5キログラム小学生が6人います。あわせて何キログラムでしょう」といった無意味な問題も算数の時間だという理由でおかしいという自覚なしに解いてしまうという。この手順化は、算数の授業で反復される教師と子どもたちのルーチンのやりとりによって強化される。この場合、日常の常識的なチェックが隠蔽され、談話の行為者が問題の無意味さに気付かないようにされている。いいかえれば、本来あるべき談話の質の二重性——算数的ルーチンと常識的チェック——の一方が隠蔽され、ただ1種類の談話秩序だけが維持されていると見ることができよう。

さらに、ある談話状況に複数の談話が共存する場合に注目することもできる。たとえば、これも教室談話の例となるが、茂呂（Moro, 1991；茂呂, 1991）は、方言使用地域の教室に、いわゆる方言的な談話の型と共通語的な型が共存することを報告している。学校教育に流通する思いなしは、学校教育はいわゆる共通語でなされるべきだとされるが、実際には両者が共存している。そして、両者の共存は教師の指名に答えてなされる公的発言と、そうではない私的な発言といった公式性の違いを作りながら教室の秩序構成に寄与する。さらには、方言使用が、一方で、教科内容の導入や授業展開の活性化に寄与しながら、他方、子ども側の方言使用がたとえ授業内容に関連していても、抑圧されて授業展開に取り上げられない場合もある。

社会学的研究にも、ここで変化・多様性指向と呼ぶものに近い研究が存在する。たとえば山田・好井（1991）は男女差別を問題にして、その談話構成に含まれる隠蔽作用を取り上げているし、好井（1992b）は差別問題の「確認糾弾会」という談話の場において、差別する側とされる側の談話の質の違いを明らかにしつつ、その談話が糾弾のプロセスを通してどのように変化するかを報告している。

おわりに

上の5組の指向は日本語談話研究の広がり of 全てをカバーするものというよりも、部分的なものにすぎない。また第二部に示す文献目録も、すべてを網羅し切れているとはいえないものである。

この5組の指向に基づいて、談話に関わる研究領域および個々の研究の違いは指摘することができたと思う。しかし、ここで強調したいのは、その違いではなく、むしろ、それらの補い合いである。それぞれの研究領域とそれに属する個々の研究は、それぞれ伝統ある研究の流儀を背負っており、特有の利点を持っているといえる。また、示したように、それぞれの間ですでに研究の交流・衝突も起こっている。

ただの談話の分析手続ではなく、談話、談話行為および行為者とそれを見るわれわれ分析者に関する体系的な考察をメソドロジーと呼ぶならば、それぞれのメソドロジーの自覚的な捉え直しと、それにもとづく今後の発展は、異なる指向に立つ研究の互いの交流によってこそ可能になると考える。

3. 日本語談話研究の現状と展望 — 文献表 —

以下の文献表には日本語談話研究を研究領域・主題別に分けて示した。展望文献を独立に配して、その後に研究領域ごとに文献を配した。配列順はそれぞれの研究領域・主題ごとの著者名のアルファベット順を採用した。

3. 1. 展望文献

3. 1. 1. 言語研究

堀口順子 1991 「あいづち研究の現段階と課題」日本語学, 10, 31-41.

真田信治 1986 「日本における社会言語学の展望」『論集日本語研究(-)現代編』明治書院

真田信治 1988 『日本における社会言語学的研究文献リスト 1981～1986 文部省科学研究費補助金(一般C)報告書』

真田信治・柴田武 1982 『日本における社会言語学の動向 特定研究(1)「学術研究動向の調査研究」報告書』

田中望 1987 「談話研究の歴史」『談話行動の諸相：座談資料の分析(国立国語研究所報告 92)』三省堂

3. 1. 2. 社会学研究

岩井洋 1990 「記憶の社会学的定義」年報社会学論集, 3

水川喜文・好井裕明 1992 「文献リスト」好井裕明(編)『エスノメソドロジー — せめぎあう〈生〉と〈常〉 —』世界思想社

水川喜文 1992 「エスノメソドロジー研究のトピック概観」好井裕明(編)『エスノメソドロジー — せめぎあう〈生〉と〈常〉 —』世界思想社

3. 1. 3. 心理・認知研究

藤崎春代 1986 「教室におけるコミュニケーション」教育心理学研究, 34, 4, 359-368.

池田進一 1991 「間接的発話行為」教育心理学研究, 39, 2, 228-238.

大浜幾久子 1988 「認知発達と母子関係」心理学評論, 31, 1, 136-145.

田島信元 1988 「母子相互交渉における子どもの情報処理過程」心理学評論, 31, 1, 158-177.

3. 2. 研究文献

3. 2. 1. 言語学的研究

江川清 1978a 「談話行動の実験社会言語学的研究」国立国語研究所研究報告集 1 (国立国語研究所報告 62) 秀英出版

江川清 1978b 「身ぶりの記述について」国立国語研究所研究報告集 1 (国立国語研究所報告 62) 秀英出版

江川清 1983 言語行動の記述法 『言語の標準化の基礎特定研究・情報化社会にお

ける言語の標準化・総括班』

- 江川清 1987a 「研究の方法」『談話行動の諸相 — 座談資料の分析 — (国立国語研究所報告 92)』三省堂
- 江川清 1987b 「身振り・動作の現れ方」『談話行動の諸相 — 座談資料の分析 — (国立国語研究所報告 92)』
- 梶弘己 1988 「外国人のための日本語会話ストラテジ — とその教育」日本語学, 7, 3, 100-117.
- 橋内武 1983 「漫才という言語行動」ノートルダム清心女子大紀要国語国文, 7-1, 19-43.
- 橋内武 1985 「もしもしから用件に入るまで」言語生活, 407, 34-42.
- 日向茂夫・杉戸清樹 1981 「場面について」国立国語研究所編『日本人の知識階層における話しことばの実態 (科学研究費報告書)』
- 堀口純子 1988 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」日本語教育, 64, 13-26.
- 堀口純子 1990 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」日本語教育, 71, 16-33.
- 堀口純子 1991 「あいづち研究の現段階と課題」日本語学, 10, 10, 31-41.
- 井出祥子他 1984 『主婦の一週間の談話資料 特定研究「情報化社会における言語の標準化」報告書』
- Ikuta, S. 1983 Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Science*, 5, 1, 37-53.
- 今石幸子 1992 「電話の会話のストラテジー」日本語学, 11, 9, 65-72.
- 伊藤博子 1991 「対談番組における 'Repair'」日本語学, 10, 6, 62-74.
- Jones, K. 1992 Ratifying conflict in Japanese interactions. *Paper presented at Association of Asian Studies Annual Meeting*, April 2, 1992 at Washington D.C.
- 北川千里 1977 「はいとええ」日本語教育, 33, 65-72.
- 熊取谷哲夫 1992 「はいともしもしとじゃの談話分析」日本語学, 11, 9, 14-25.
- 黒崎良昭 1987 「談話進行上の相づちの運用と機能 — 兵庫県滝野方言について —」国語学, 150, 109-122.
- 国立国語研究所 1971 『待遇表現の実態 — 松江 24 時間調査資料から — (国立国語研究所報告 41)』秀英出版.
- 国立国語研究所 1987 『日本語教育映画基礎編総合文型表』日本シネセル
- 小宮千鶴子 1986 「相づち使用の実態 — 出現傾向とその周辺 —」語学教育研究論叢 (大東文化大学語学研究所), 3, 43-62.
- 松田陽子 1988 「対話の日本語教育 — あいづちに関連して —」日本語学, 7, 13,

59-66.

- Maynard, Senko 1986 On back-channel behavior in Japanese and English casual conversation. *Linguistics*, 24, 6, 1079-1108.
- メイナード・泉子 1987 「日米会話におけるあいづち表現」言語, 16, 12, 88-92.
- Maynard, S. K 1989 *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, New Jersey: Ablex.
- 南不二男 1972 「日常会話の構造 — とくにその単位について —」言語, 1, 2, 28-36.
- 南不二男 1979 「言語行動研究の問題点」南(編)『講座言語第3巻 言語と行動』大修館書店
- 南不二男 1981 「日常会話の話題の推移 — 松江テキストを資料として —」『藤原与一先生古稀記念論集方言学論叢 1』三省堂
- 南不二男 1984 「理解のモデルについてのおぼえがき」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第2巻 言語学編』三省堂
- 南不二男 1987 「談話行動論」『談話行動の諸相 — 座談資料の分析 — (国語研報告 92)』三省堂
- 南不二男・江川清 1987 「談話テキストの作成」『談話行動の諸相 — 座談資料の分析 — (国立国語研究所報告 92)』三省堂
- 水谷信子 1983 「あいづちと応答」水谷修(編)『はなしことばの表現』筑摩書房
- 水谷信子 1984 「日本語教育と話しことばの実態」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第2巻 言語学編』三省堂
- 水谷信子 1988a 「話しことばの比較対照」国立国語研究所(監修)『話しことばのコミュニケーション』(日本語教師用参考書Ⅱ) 凡人社
- 水谷信子 1988b 「あいづち論」日本語学, 7, 13, 4-11.
- 水谷修 1991 「会話研究の新開拓」日本語学, 10, 10, 4-9.
- 中田智子 1991 「会話にあらわれるくり返しの発話」日本語学, 10, 10, 52-62.
- 中田智子 1992 「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究報告集 13 (国立国語研究所研究報告 103)』秀英出版
- 岡本能里子 1990 「電話による会話終結の研究」日本語教育, 72, 145-159.
- 岡本能里子 1991 「会話終結の談話分析」東京国際大学論叢商学部編, 44, 117-133.
- 小野寺典子 1992 「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」日本語学, 11, 9, 26-38.
- 劉建華 1987 「電話でのアイツチ頻度の中日比較」言語, 16, 12, 93-95.
- 杉戸清樹 1978 「身振りを記録する — 変位の記録表試案 —」『国立国語研究所研究報告集 1 (国立国語研究所報告 62)』秀英出版
- 杉戸清樹 1983 「待遇表現としての言語行動 — 注釈という視点 —」日本語学, 2,

7, 32-42.

杉戸清樹 1987 「発話のうけつき」『談話行動の諸相 — 座談資料の分析 — (国立国語研究所報告 92)』三省堂

杉戸清樹 1989 「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち」日本語教育, 67, 48-59.

杉戸清樹・沢木幹栄 1977 「衣服を買う時の言語行動 — その諸側面の観察 —」言語生活, 314, 42-52.

杉戸清樹・沢木幹栄 1979 「言語行動の記述 — 買い物行動における話しことばの諸側面 —」南(編)『講座言語第3巻 言語と行動』大修館書店

杉藤美代子 1987 「ポーズとイントネーション」『談話行動の諸相 — 座談資料の分析 — (国立国語研究所報告 92)』三省堂

杉藤美代子 1991 「談話分析・発話とポーズ」日本語学, 10, 10, 19-30.

ポリー・ザトラウスキー 1986a 「談話の分析と教授法 (I)」日本語学, 5, 11, 24-41.

ポリー・ザトラウスキー 1986b 「談話の分析と教授法 (II)」日本語学, 5, 12, 99-108.

ポリー・ザトラウスキー 1987 「談話の分析と教授法 (III)」日本語学, 6, 1, 78-87.

ポリー・ザトラウスキー 1990 「ケース 12 発話の機能」寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半沢幹一(編)『ケーススタディ日本語の文章・談話』桜楓社

ポリー・ザトラウスキー 1991a 「会話における単位について — 話段の提案」日本語学, 10, 10, 79-96.

ポリー・ザトラウスキー 1991b 『日本語の談話の構造分析 — 勧誘の談話のストラテジーの考察 —』筑波大学博士論文(くろしお出版 1993 年近刊)

ポリー・ザトラウスキー 1992a 「セールスの電話の会話分析の試み」日本語学, 11, 9, 50-64.

Szatrowski, P. 1992b Invitation-refusals in Japanese telephone conversations. *Paper presented at Association of Asian Studies Annual Meeting*, April 2, 1992 at Washington D.C.

沢木幹栄 1987a 「声の使い方・調音など」『談話行動の諸相 — 座談資料の分析 — (国立国語研究所報告 92)』三省堂

田中望 1982 「別れの言語行動様式 — 日米の比較のために —」言語生活, 363, 38-46.

田中望 1985 「外国人の日本語行動 — 会話のオープニングストラテジー」日本語学, 4, 8, 70-78.

田中望 1987 「談話研究の歴史」『談話行動の諸相 — 座談資料の分析 — (国立国語研究所報告 92)』三省堂

Watanabe, S. 1992 Japanese ways of carrying out group discussion. *Paper*

presented at Association of Asian Studies Annual Meeting, April 2, 1992
at Washington D.C.

Yamada, H. 1992 *American and Japanese business discourse: A comparison of interactional styles*. Norwood, New Jersey: Ablex.

米田正人 1978 「談話行動の計量的研究について」『国立国語研究所研究報告集 1 (国立国語研究所報告 62)』 秀英出版

米田正人 1987 「コミュニケーションネットワーク」『談話行動の諸相 — 座談資料の分析 — (国立国語研究所報告 92)』 三省堂

3. 2. 2. 社会学的研究

【会話分析・エスノメソドロジー研究】

阿部耕也 1986 「子ども電話相談における類型化の問題」教育社会学研究, 41, 151-165

鮎川潤 1982 「逸脱と帰属：ラベリング論 シンボリック・インタラクショニズム エスノメソドロジーと帰属理論との架橋をめざして」松山商科大論集, 34, 51-87.

江原由美子 1988 『フェミニズムと権力作用』 勁草書房

江原由美子 1992 「セクシャル・ハラスメントのエスノメソドロジー — 週刊誌にみる『解釈の政治学』」好井裕明(編)『エスノメソドロジーの現実 — せめぎあう〈生〉と〈常〉 — 』 世界思想社

江原由美子・長谷川公一他 1989 『ジェンダーの社会学—女たち／男たちの世界—』 新曜社

江原由美子・山岸健編 1985 『現象学的社会学—意味へのまなざし—』 三和書房

江原由美子・好井裕明・山崎敬一 1984 「性差別のエスノメソドロジー—対面的コミュニケーション状況における権力装置—」現代社会学, 18, 143-176. アカデミア出版会

浜日出夫 1992 「現象学的社会学からエスノメソドロジーへ」好井裕明(編)『エスノメソドロジーの現実 — せめぎあう〈生〉と〈常〉 — 』 世界思想社

林芳樹 1985 「エスノメソドロジーと教育調査」松原治郎(編)『教育調査法』 有斐閣

林芳樹 1986 「解釈的社会学再考—エスノメソドロジーの視座構造」嵯山女学園大学研究論集, 17-1, 165-175.

井出裕久 1989 「統制グラフ法の方法論的ディレンマ—エスノメソドロジーの視角の必然性」明治大学社会・人類学年報, 3, 126-143.

稲垣恭子 1989 「子どもらしさの社会的構成」柴野昌山(編)『しつけの社会学』 世界思想社

要田洋江 1992 「障害者を排除する実践的推論の様相」好井裕明(編)『エスノメソドロジーの現実 — せめぎあう〈生〉と〈常〉 — 』 世界思想社

- 榎村志郎 1989 「紛争行動と文化的説明 — 日本の労働争議における文化の使用法」
藤倉皓一郎・長尾龍一（編）『国際摩擦 — その法文化的背景』 日本評論社
- 榎村志郎 1991a 「交渉と和解」木下富雄・棚瀬孝雄（編）『法の行動科学』 福村出版
- 榎村志郎 1991b 「労働仲裁の社会学的秩序」『三ヶ月章先生古稀祝賀論文集・民事手続法学の革新（上）』 有斐閣
- 榎村志郎 1992 「法律的探求の社会的組織化」好井裕明（編）『エスノメソドロジーの現実 — せめぎあう〈生〉と〈常〉 — 』 世界思想社
- 加藤春恵子 1981 「エスノメソドロジー」安田三郎他（編）『基礎社会学第二巻』 東洋経済新報社
- 加藤春恵子 1987 「女性解放運動のエスノメソドロジー—コミュニケーションとしての社会運動—」栗原彬・庄司興吉（編）『社会運動と文化形成』 東京大学出版会
- 今防人 1982 「ガーフィンケル—エスノメソドロジーの挑戦—」現代思想, 10, 10, 138-141.
- 宮脇幸生 1987 「談話におけるカテゴリー化のプロセス」谷泰（編）『社会的相互行為の研究』 京都大学人文科学研究所
- 水川喜文 1990 「初期エスノメソドロジー研究〈序説〉」社会学論考, 11, 東京都立大学, 59-82.
- 水川喜文 1992 「エスノメソドロジーの歴史的展開」好井裕明（編）『エスノメソドロジーの現実 — せめぎあう〈生〉と〈常〉 — 』 世界思想社
- 中根光敏 1992 「『寄せ場』差別の現象学 — 排除のカテゴリー化作用と市民社会のロジック —」好井裕明（編）『エスノメソドロジーの現実 — せめぎあう〈生〉と〈常〉 — 』 世界思想社
- 西阪仰 1988 「行為出来事の相互行為的構成」社会学評論, 39, 2, 2-18.
- 西阪仰 1990a 「心理療法の社会秩序Ⅰ—セラピーはいかにしてセラピーに作りあげられていくか—」明治学院大学社会学部附属研究所年報, 20, 1-24.
- 西阪仰 1990b 「コミュニケーションのパラドクス」土方（編）『ルーマン／来るべき知』 勁草書房
- 西阪仰 1991 「独り言と『ながら言』—心理療法の社会秩序Ⅱ—」明治学院論叢 社会学・社会福祉学研究, 85, 1-25.
- 西阪仰 1992a 「参与フレームの身体的組織化」社会学評論, 43, 1, 58-73.
- 西阪仰 1992b 「エスノメソドロジーは どういうわけで会話分析を行うようになったか」好井裕明（編）『エスノメソドロジーの現実 — せめぎあう〈生〉と〈常〉—』 世界思想社
- Nishizaka, A. 1992c The use of 'power': The discursive organization of

- powerfulness. *Human Studies*, 15, 129-144.
- 岡原正幸・石川准・好井裕明 1986 「障害者・介助者・オーディエンス — 障害者の『自立生活』が抱える諸問題 —」解放社会学研究, 1, 25-41. 明石書店
- 坂本佳鶴恵 1989 「行為論への一視角 — 解釈的パラダイム (ゴッフマン・エスノメソドロジー) の可能性をめぐって —」社会学評論, 40, (3), 17-30.
- 佐野正彦 1983 「レイベリング論に関する現象学的批判」東洋大学大学院紀要, 20, 61-72.
- 佐野正彦 1984 「逸脱研究とエスノメソドロジー」東洋大学大学院紀要, 21, 77-88.
- 清矢良崇 1983a 「学習の過程としての会話 — エスノメソドロジーと社会化研究」教育学研究集録 (筑波大学大学院教育学研究科), 7, 61-70.
- 清矢良崇 1983b 「社会的相互行為としての初期社会化の様式 — しつけ場面におけるカテゴリー化問題」教育社会学研究, 38, 122-133.
- 清矢良崇 1985 「方法としての社会化 — 解釈的パラダイムと方法論 (I)」教育学研究集録 (筑波大学大学院教育学研究科), 9, 11-23.
- 清矢良崇 1989 「生活指導場面における教師のカテゴリー運用分析の視点について」筑波大学教育学系論集, 14-1, 1-14.
- 椎野信雄 1989 「On sociological studies of science」人文学報 (東京都立大学人文学部), 210, 81-100.
- 椎野信雄 1990 「On sociological studies of science」人文学報 (東京都立大学人文学部), 219, 83-102.
- 巨明志 1989 「確認・糾弾会のダイナミックス — 〈いま, ここ〉での確認・糾弾会」解放社会学研究, 3, 43-52.
- 巨明志 1990 「確認・糾弾会と差別キャンペーン — 〈いま, ここ〉の噴出と隠蔽」解放社会学研究, 4, 21-31.
- 山田昌弘 1992 「『家族』であることのリアリティ」好井裕明 (編) 『エスノメソドロジーの現実 — せめぎあう〈生〉と〈常〉 —』世界思想社
- 山田富秋 1980 「解釈的パラダイム再考」社会学年報 (東北社会学会), 8, 61-79.
- 山田富秋 1981 「エスノメソドロジーの論理枠組と会話分析」社会学評論, 125, 64-79.
- 山田富秋 1982a 「常識的カテゴリーの優位性 — ガーフィンケルのシュッツ解釈 —」社会学研究 (東北社会学会), 44, 129-148.
- 山田富秋 1982b 「言語活動と文化的相対性 — エスノメソドロジーの自然言語をめぐって —」社会学研究 (東北社会学会), 42・43, 387-402.
- 山田富秋 1983 「言語と行動」社会学研究 (東北社会学会), 45, 123-142.
- 山田富秋 1984 「知識論としてのエスノメソドロジー」社会学研究 (東北社会学会), 47, 69-88.

- 山田富秋 1985a 「プラクティスとしての文化」 江原・山岸（編）『現象学的社会学 — 意味へのまなざし —』三和書房
- 山田富秋 1985b 「子どもの会話と子どもの世界 — 会話分析からのアプローチ —」
山口女子大学研究報告, 11, 75-84.
- 山田富秋 1986 「『一ツ瀬病院』のエスノグラフィー」解放社会学研究, 1, 62-74.
- 山田富秋 1989 「確認・糾弾会のリアリティ — 傍観者的コミュニケーション・スタイル vs. 〈いまここ〉でのコミュニケーション・スタイル」解放社会学研究, 3, 8-23.
- 山田富秋 1990 「市民社会をめぐるディスコースの陥穽 — 現代社会の差別を維持・拡大する『装置』の解説 —」解放社会学研究, 4, 32-43.
- 山田富秋・好井裕明 1991 『排除と差別のエスノメソドロジー』新曜社
- 山田富秋 1992 「精神医療批判のエスノメソドロジー」好井裕明（編）『エスノメソドロジーの現実 — せめぎあう〈生〉と〈常〉 —』世界思想社
- 山田富秋・好井裕明・山崎敬一（編訳）1987 『エスノメソドロジー — 社会学的思考の解体 —』せりか書房
- 山村賢明 1982 「解釈的パラダイムと教育研究—エスノメソドロジーを中心として」教育社会学研究, 37, 20-33.
- 山崎敬一 1982 「常識的カテゴリーと科学的カテゴリー」社会学年誌（早稲田大学社会学会）, 23, 97-114.
- 山崎敬一 1983 「社会的行為論とエスノメソドロジー」ソシオロギス, 7, 88-106.
- 山崎敬一 1985 「男と女—ことばという道具立て —」江原・山岸（編）『現象学的社会学 — 意味へのまなざし —』三和書房
- 山崎敬一 1987 「社会的行為における意味と規則」人文学報（東京都立大学人文学部）, 195, 1-26.
- 山崎敬一 1990 「いかにして理解できるのか — 『意味と社会システム』再考」理論と方法, 5, 1, 7-22.
- 山崎敬一 1991 「主体主義の彼方に — エスノメソドロジーとは何か」西原和久（編著）『現象学的社会学の展開 — A. シュッツ継承へ向けて』青土社
- 山崎敬一・好井裕明 1984 「会話の順番取りシステム — エスノメソドロジーへの招待」月刊言語, 13 7, 86-94.
- 要田洋江 1986 「『とまどい』と『抗議』 — 障害児受容過程にみる親たち —」解放社会学研究, 1, 8-24.
- 要田洋江 1987 「『自閉』と『拘束』 — 障害児をもつ親たちが孤立する背景 —」大阪市立大学生活科学部紀要, 35, 1-14.
- 好井裕明 1983 「実践的推論活動の三位相 — エスノメソドロジーのトピック —」ソシオロギス, 7, 70-86.

- 好井裕明 1984 「無知という名の差別行為 — 差別表現をした筆者との『話し合い』を素材として —」 解放教育, 180, 56-64.
- 好井裕明 1985 「日常的現象としての性差別 — 現代大学生が描く〈男〉と〈女〉 —」 江原・山岸(編)『現象学的社会学 — 意味へのまなざし —』 三和書房
- 好井裕明 1987 「『エスノメソドロジーを生きる』ために」 山岸健(編著)『日常生活と社会理論』 慶應通信
- 好井裕明 1988a 「エスノメソドロジー — 日常生活の批判的実践として —」 新睦人・三沢謙一(編著)『現代アメリカの社会学理論』 恒星社厚生閣
- 好井裕明 1988b 「常識的推論と差別してしまう可能性 — 差別発言を“正当化”する推論構造をめぐる —」 解放社会学研究, 2, 55-77.
- 好井裕明 1989 「確認・糾弾会のストーリー — 〈反差別の意志〉を日常生活空間へ痕跡させるプロセス —」 解放社会学研究, 3, 24-42.
- 好井裕明 1990a 「エスノメソドロジーの社会分析」 徳永恂・鈴木広(編著)『現代社会学群像』 恒星社厚生閣
- 好井裕明 1990b 「〈今—ここ〉から〈今—ここ〉へ — 差別問題の社会的言説の空洞化を越えるために —」 解放社会学研究, 4, 65-76.
- 好井裕明(編) 1992a 『エスノメソドロジーの現実 — せめぎあう〈生〉と〈常〉 —』 世界思想社
- 好井裕明 1992b 「〈生〉のせめぎあきと出会う場所 — 反差別運動のエスノメソドロジーに向けて —」 好井裕明(編)『エスノメソドロジーの現実 — せめぎあう〈生〉と〈常〉 —』 世界思想社
- 好井裕明・山田富秋 1987 「対談：エスノメソドロジーの戦略 — 『社会学すること』を疑う —」 談, No.39 — 特集 社会科学再考Ⅰ 理論のプレシオジテ — たばこ総合研究センター, 30-48.
- [ライフストーリー研究]
- 小林多寿子 1992 「〈親密さ〉と〈深さ〉 — コミュニケーション論からみたライフヒストリー —」 社会学評論, 42, 4, 419-435.
- 大山信義編 1988 『船の職場史』 御茶の水書房.
- 奥村和子・桜井厚(編) 1991 『女たちのライフストーリー — 笑顔の陰の戦前・戦後』 矢沢書房
- 桜井厚 1988a 「被差別部落の生活史(1) — 性規範・性役割の非対称性とその変化 —」 中京大学社会学部紀要, 2, 2, 31-71.
- 桜井厚 1988b 「語りのなかの女たち — 被差別部落の生活史(2) —」 中京大学社会学部紀要, 3(1), 1-77.
- 桜井厚 1989 「語りのリアリティ — 被差別部落の生活史(3) —」 中京大学社会学部紀要, 3, 2, 1-39.

- 桜井厚 1990 「語りにみる被差別のリアリティ ― 口述生活史の多面的意味領域 ―」
解放社会学研究, 4, 44-64.
- 桜井厚 1992 「会話における語りの位相 ― 会話分析からライフストーリーへ ―」
好井裕明(編)『エスノメソドロジーの現実 ― せめぎあう〈生〉と〈常〉 ―』
世界思想社
- 若林良和 1991 『カツオ一本釣り ― 黒潮の狩人たちの海上生活誌』 中公新書
[想起研究]
- 浜田寿美男 1986 『証言台の子どもたち』 日本評論社
- 浜田寿美男 1988 『狭山事件虚偽自白』 日本評論社
- 浜田寿美男 1991 『ほんとうは僕 殺したんじゃないもの』 筑摩書房
- 浜田寿美男 1992a 『自白の研究』 三一書房
- 浜田寿美男 1992b 「共同想起の場としての取調室」佐々木正人(編)『エコロジカル・マインド ― 生活の認識』現代のエスプリ, 298, 174-183.
- 岩井洋 1992 「想起することと歴史をつくること」佐々木正人(編)『エコロジカル・マインド ― 生活の認識』現代のエスプリ, 298, 195-202.
- 高取憲一郎 1980 記憶過程におけるコミュニケーションの役割 ― 個人再生と共同再生の比較研究 ― 教育心理学研究, 28, 2, 108-113.
- 3.2.3. 心理・認知研究
[認知プロトコル研究]
- 秋田喜代美・大村彰道 1991 「幼児・児童のお話作りにおける因果的産出能力の発達」教育心理学研究, 35, 65-73.
- 安西祐一郎・内田伸子 1981 「子供はいかに作文を書くか?」教育心理学研究, 24, 4, 323-332.
- 藤崎春代 1982 「幼児の報告場面における計画的構成の発達的研究」教育心理学研究, 30, 54-63.
- 藤崎春代 1983 「幼児教育場面における保育者の援助: 異年令児混合の製作場面の検討」日本教育心理学会第25回総会発表論文集, 544-545.
- 藤崎春代・無藤隆 1985 「幼児の共同遊びの構造」教育心理学研究, 33, 1, 33-42.
- 古屋喜美子・田代康子 1989 「幼児の絵本受容過程における登場人物と読者のかかわり」教育心理学研究, 37, 252-258.
- 倉持清美 1992 「幼稚園の中のをめぐる子ども同士のいざこざ ― いざこざで使用される方略と子ども同士の関係 ―」発達心理学研究, 3, 1, 1-9.
- 無藤隆 1982a 「言語とコミュニケーション」坂本昂(編)『思考・知能・言語(現代基礎心理学7)』東京大学出版会
- 無藤隆 1982b 「会話」三宅和夫他(編)『波多野・依田児童心理学ハンドブック』金子書房

- 無藤隆 1982c 「会話の理解」佐伯胖（編）『推論と理解（認知心理学講座3）』東京大学出版会
- 無藤隆他 1985 『会話能力の発達段階 特定研究「情報化社会における言語の標準化」報告書』
- 仲真紀子 1986 「拒否表現における文脈情報の利用とその発達」教育心理学研究, 34, 111-119
- 大村彰道・荻野美佐子・遠藤利彦・針生悦子・石川有紀子・白佐いずみ 1989 「絵本読み場面における母子相互作用 — 母親の発話カテゴリー」安田生命事業団研究助成論文集, 25, 2, 24-33.
- 大村彰道・荻野美佐子・遠藤利彦・針生悦子 1990 「絵本読み場面における母子相互作用 — 3歳児と4歳児に対する母親の発話の変化—」安田生命事業団研究助成論文集, 26, 2, 17-25.
- 田島啓子 1987 「ファンタジー創作における子ども同士の共同作話経験の効果」母子研究, 8, 22-33.
- 田島信元 1984 「子どもはどのようにモノゴトを理解するか」発達, 18, 95-103.
- 田島信元 1988 「母子相互交渉における子どもの情報処理過程」心理学評論, 31, 158-177.
- 田島信元 1990 「社会的文脈における子供の情報処理過程の変容と一貫性」発達の心理学と医学, 1, 291-301.
- 田島信元・上村佳世子 1988a 「コミュニケーションと情報処理：教授学習仮定の分析」東京外国語大学論集, 36, 209-230.
- 田島信元・上村佳世子 1988b 「コミュニケーションと情報処理：母子 教師 — 生徒 教師 — 障害児 留学生間相互交渉における情報処理過程の分析」安田生命社会事業団研究助成論文集, 24, 2, 73-87.
- 佐藤公治・星野明実・竹本美保 1986 「授業場面における児童の理解過程：Ⅰ — 理解過程の二つのインタラクションについて —」年報いわみざわ, 8, 1-12.
- 佐藤公治 1986a 「授業場面における児童の理解過程：Ⅱ — 文学教材の読解過程と知識表現について —」年報いわみざわ, 9, 11-22.
- 佐藤公治 1986b 「授業場面における児童の談話理解とその過程をめぐる諸問題：研究ノート(1) — 知のコミュニケーションという観点から —」北海道教育大学紀要（第一部C）, 38, 2, 71-85.
- 佐藤公治 1986c 「授業場面における児童の談話理解とその過程をめぐる諸問題：研究ノート(2) — 知のコミュニケーションという観点から（続） —」北海道教育大学紀要（第一部C）, 39, 1, 121-135.
- 佐藤公治 1987 「授業場面における児童の談話理解とその過程をめぐる諸問題：研究ノート(3) — 意味世界の表現モデルについての検討と「授業 — 学習研究」へ

- の implication —」 北海道教育大学紀要（第一部 C）, 40, 1, 55-68.
- 外山紀子・無藤隆 1991 「小学生女兒のごっこ遊びにおけるスクリプトとメタ発話の発達的变化」 発達心理学研究, 1, 1, 10-19.
- 内田伸子 1989a 「子どもの推敲方略の発達 — 作文における自己内対話の過程 —」 お茶の水女子大学人文科学紀要, 42, 75-104.
- 内田伸子 1989b 「非具象絵画ストーリーの構成的理解における "欠如 — 補充" 枠組みの発達」 教育心理学研究, 37, 327-336.
- 内田伸子 1991 『子どもの文章』 東京大学出版会
- 上村佳世子・田島信元 1987 「子どもの理解過程におよぼす社会的相互交渉の効果：不母子関係の視点から」 母子研究, 8, 1-21.
- 上村佳世子・田島信元 1988 「社会的相互交渉における子どもの情報獲得過程」 母子研究, 9, 1-11.
- 〔教室コミュニケーションの類型化〕
- 岸俊彦 1981 「教授学習過程の研究 — 教師・児童間の発言関連の類型」 教育心理学研究, 29 1-9.
- 岸田元美 1980 「教授発言の文末文型と教授意図の認知」 徳島大学学芸紀要（教育科学）, 29, 35-42.
- 松田伯彦・松田文子 1982 「教師の経験差による教授行動の差異」 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 720-721.
- 松田伯彦・松田文子 1983 「教師の経験差による教授行動の差異（2）」 日本教育心理学会 第25回総会発表論文集, 536-537.
- 松田伯彦・松田文子 1984 「教師の経験差による教授行動の差異（3）」 日本教育心理学会 第26回総会発表論文集, 582-583.
- 松田伯彦・松田文子・西村正司・金納善明・上杉賢士・塚本充 1980 「教師と教育実習生の教授行動16～19」 日本教育心理学会第22回総会発表論文集, 694-701.
- 松田伯彦・松田文子・金納善明・上杉賢士・小川麻有美・石井和生・宮野祥雄 1977 「わかる授業の教育心理学的研究1～5」 日本教育心理学会第19回総会発表論文集, 586-595.
- 松田伯彦・松田文子・金納善明・上杉賢士・塚本充・中塚勝俊・丸栄一 1981 「教師の経験差と教授行動1～4」 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 726-733.
- 松田伯彦・松田文子・丸栄一・金納善明・上杉賢士・石井和生・宮野祥雄 1978 「わかる授業の教育心理学的研究6～10」 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 568-577.
- 松田伯彦・松田文子・金納善明・上杉賢士・宮野祥雄・西村正司・石井和生・塚本充 1979 「教師と教育実習生の教授行動11～15」 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 726-735.

- 松田伯彦・丸栄一・松田文子・金納善明・上杉賢士・宮野祥雄・小川麻有美・石井和生・高梨泰 1976 「教師と教育実習生の教授行動5～10」 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 576-587.
- 佐々木俊介 1977 「授業分析における概念についてⅠ」 筑波大学教育学系論集, 1, 93-108.
- 多田俊文・岡田裕・伊藤顕 1976 「教授行動の分析次元(Ⅰ)・(Ⅱ)」 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 532-535.
- 塚田紘一 1979 「教師の言語行動と生徒の学力および学級適応との関係」 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 740-741.
- 塚田紘一 1980 「教師の言語行動と生徒の教師認知との関係」 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 662-663.
- 塚田紘一 1982 「教師の対個人的言語行動と生徒の学力及び教師認知との関係」 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 718-719.
- 塚田紘一 1983a 「教師の対個人的言語行動と生徒の学級適応の関係」 日本教育心理学会第25回総会発表論文集, 538-539.
- 塚田紘一 1983b 「教師 — 生徒の言語的相互作用の研究(1): 言語的相互作用 pattern の安定性と学力の伸びとの関係」 明星大学人文学部研究紀要, 19, 71-89.
- 塚田紘一・酒井清・岸俊彦 1976 「授業分析の方法に関する一試案Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 536-541.
- [状況論的談話研究]
- Arimoto, N. 1991a A computer tool designed to change children's concept of school math. *Educational Technology Research*, 14, 11-16.
- 有元典文 1991b 「教室のチューリング・テスト」 現代思想, 19, 6, 157-165.
- Arimoto 1991c Becoming a 'Computer', becoming aware of the language game of school math. *Paper presented at American Educational Research Association 1991 Meeting at Chicago*.
- Moro, Y. 1991a Ways of speaking in school: Multi-voicedness in school speech genre. *Paper presented at American Educational Research Association 1991 Meeting at Chicago*.
- 茂呂雄二 1991b 「教室談話の構造」 日本語学, 10, 10, 63-72.
- 茂呂雄二・小高京子 1992 「教室の参加構造と発話の多様性」 教育心理学会34回発表論文集, 56.
- Sayeki, Y. 1990 Designing multi-voicedness in discourses. *Paper presented at the Second International Standing Conference of Research on Activity Theory, Lahti, Finland*.
- Tajima, N. 1992 An analysis of social interaction in a Japanese elementary

- classroom. Paper presented at the Symposium on one child day: Micro-ethnographic studies of children's lives in Japan and United States, *The First Conference for Sociocultural Researches*, Madrid, Sept. 15-18
- Toma, C. 1991 Speech genre and social language of school in the U.S. and Japan. *Paper presented at American Educational Research Association 1991 Meeting at Chicago*.
- Toma, C. 1992 Who is control?: An analysis of the discourse space among a child and parents. Paper presented at the Symposium on one child day: Microethnographic studies of children's lives in Japan and United States, *The First Conference for Sociocultural Researches*, Madrid, Sept. 15-18
- Toma, C. and Wertsch, J. 1991 Sociocultural approach to mediated action: An analysis of classroom discourse. *Research and Clinical Child Development Annual Report*, 13, 69-81.
- Uemura, K. 1992 Japanese negotiation and decision making processes. Paper presented at the Symposium on one child day: Micro-ethnographic studies of children's lives in Japan and United States, *The First Conference for Sociocultural Researches*, Madrid, Sept. 15-18
- 上野直樹 1990 「数学のメタファーと学校の言語ゲーム」 芳賀純・子安増生（編）
メタファーの心理学 誠信書房
- 上野直樹 1991a 「状況的認知」『児童心理学の進歩 1991 年版』 金子書房
- Ueno, N. 1991b Language game of school and use of cognitive artifacts. *Paper presented at American Educational Research Association 1991 Meeting at Chicago*.
- 上野直樹 1991c 「行為としての知能・外側にある知能」現代思想, 19, 6, 88-103.
- ### 3.2.4. インターフェース研究
- 旭敏之・井関治・宮井均 1992 「製品開発におけるインタフェース評価」日本認知科学会（編）『認知科学の発展 5』 講談社
- 阪谷徹・野島久雄 1989 「ネットワークユーザ間の利用・操作方法に関する情報の伝達構造：自発的に構築されたネットワークにおける一例」コンピュータネットワークのヒューマンウェアシンポジウム 東京 情報処理学会.
- 旭敏之・宮井均 1988 「人間 — コンピュータ対話におけるトラブル」第四回ヒューマンインタフェースシンポジウム論文集, 235-238.
- 旭敏之 1989a 「プロトコル解析実験におけるトラブル時発話の特徴表現」第五回ヒューマンインタフェースシンポジウム論文集, 509-512.
- 旭敏之・伊藤真美・宮井均 1989b 「プロトコル解析によるユーザ観察とトラブル」

- Hman Interface News & Report, 4-3, 279-284.
- 旭敏之・伊藤真美・井関治 1991 「ユーザインタフェース評価のためのトラブルモデル」 情報処理学会第 42 回大会予稿集.
- 原田悦子 1992 「対話のメディア／モードが対話の主観的評価に及ぼす効果」 日本心理学会第 56 回発表論文集,
- 原田悦子 1993 「受話器の心理学的効果：インターフェースとしての受話器」 現代のエスプリ, 306, 75-83.
- 石井裕 1989 「グループウェア技術の研究動向」 情報処理学会誌, 30, 1502-1508.
- Ishii, H., Kobayashi, M., and Grudin, J. 1992 Integration of inter-personal space and shared workspace: ClearBoard design and experiments. *Proceedings of CSCW '92 ACM 1992 Conference on Computer Supported Cooperative Work*, Tronto, Canada, Nove. 1-4.
- Ishii, H. and Miyake, N. 1991 Toward an open shared workspace: Computer and video fusion approach of teamwork station. *Communication of The ACM*, 34, 12, 37-50.
- 加藤隆 1985 「計算機ユーザの認知的行動原理を探るための一手法」 情報処理 29-9, 1106-1109.
- 加藤隆 1987 「文書処理とヒューマンインタフェース — 認知工学的視点」 情報処理学会研究会報告, DPHI, 14-5.
- 川浦康至 1993 「メディアコミュニケーション」 現代のエスプリ, 306, 9-19.
- 向後千春 1993 「留守番電話はなぜかけにくい」 現代のエスプリ, 306, 102-109.
- 野島久雄・阪谷徹 1992 「コンピュータネットワーク利用場面における他者の役割」 日本認知科学会（編）『認知科学の発展 5』 講談社
- 野中郁次郎・紺野登・川村尚也 1991 「組織的『知の創造』の方法論」 組織科学, 24, 1, 2-20.
- 岡田朋之 1993 「伝言ダイヤルという疑似空間」 現代のエスプリ, 306, 93-101.
- 三宮真智子 1993 「メディアの特性とコミュニケーション — 会議における意見交換を中心に —」 現代のエスプリ, 306, 38-45.

注① この報告はわれわれが進めている「幼児・児童の書きことばの獲得に関する調査研究」にもとづいている。ここに示した展望も文献表も中間的なものであり、当然載せるべきものももれている場合もあると思われる。ここで取り上げられなかった文献情報および資料情報について、お気付きの方は、御一報いただければ幸いである。

注② 以下の方々から貴重な情報やコメントをいただいた。記して感謝の意としたい。
石井裕氏（NTT ヒューマンインターフェース研究所）、海保博之氏（筑波大学）、
井関治氏（NEC 関西 C&C 研究所）、中田智子氏（国語研）、田島信元氏（東京外大）、
佐藤公治氏（北海道大学）、ポリー・ザトラウスキー氏（ミネソタ大学）、
上村佳世子氏（青山学院大）

引用文献

- Edwards, D. and Mercer, N. 1989 *Common knowledge: The development of understanding in the classroom*. London; Methuen.
- Flanders, N. A. 1970 *Analyzing teaching behaviour*. Reading, Mass.: Addison-Wesley.
- Goodwin, C. and Goodwin, M. H. (in press) Formulating planes: Seeing as a situated activity. To appear in D. Middleton and Y. Emgestrom (Eds.) *Distributed cognition in the workplace*. London: Sage.
- Suchman, L. 1987 *Plans and situated actions: The problem of human machine communication*. Cambridge, Mass.; Cambridge University Press.